

大学院内地留学 研究の概要及び研修成果の活用

The Instruction of Extensive Reading and Metacognitive Awareness of Reading Strategies for Japanese EFL Junior High School Students: The Effects on Comprehension and Awareness and Use of Reading Strategies

上越教育大学 教科・領域教育専攻 言語系コース(英語)

松田 英樹

1 本研究の背景

読み書き能力は、一般社会においても英語科教育においても長い間重視されてきた。コミュニケーション重視の英語科教育への移行に伴い、精読よりも現実の世界で行われるリーディングに近く、全体的理解や読む楽しみを主たる目的に多量に教材を読む多読指導が目されるようになった。さらに、学習者中心の教育への移行に伴い、リーディング研究においても読解過程に焦点が当てられるようになり、読解方略に目が向けられるようになった。

これまでの研究で、リーディングは数多くの要因の影響を受け、それらの要因同士もまた影響し合う複雑な認知過程であることがわかってきている。多読の重要性は多くの研究者に指摘され、さまざまな方法論が提案されてきた。外国語の初級レベルでの実証研究は少ないが、読解力や情意面への影響が明らかとなった。しかしながら、言語レベルをある程度制御した多読において、ボトム・アップ処理の負担が減った場合に、学習者がトップ・ダウン処理に認知資源を活用できるかどうか、どのような方略が多読の特徴的な方略であるか、また、読解過程のどの部分に影響を与えるのかは十分に調査されていない。一方、方略指導においては、個々の方略のみならず、読解方略のメタ認知的認識と制御、すなわち読み手のメタ認知の発達が不可欠であることがわかってきた。

2 研究の目的

第1の目的は、多読指導あるいは読解方略のメタ認知的指導がどのように読解力、読解方略の認識、読解方略の使用に影響を及ぼすかを明らかにすることである。第2は、方略指導を伴う多読指導は言語熟達度が低い初級の外国語学習者の読解不安度を低め、動機づけを高めるかを明らかにすることである。第3は、題材の選択理由、興味深さ・難易度、自己選択、タスクの特徴を明らかにすることである。

3 研究の方法

参加者は公立中学校の3年生 69名である。8回の選択授業において、実験群1は多読指導と読解方略指導を受け、実験群2は多読指導と読解方略のメタ認知的指導を受け、統制群は語彙・文法・読解質問中心の読解指導を受けた。

事前・事後の読解力測定には多肢選択式の英検の読解問題が用いられ、読解方略の認識の調査には5段階評定の質問紙が用いられた。7種21冊の検定教科書が多読教材として用いられ、実験群の参加者は読み物を自己選択し、多読記録表によって読解過程を報告した。それに加えて、実験群2の参加者は読解方略を計画・監視・評価するためのチェックリストを用いた。

読解テスト、読解方略のメタ認知的認識の質問紙、および事後評価アンケートは²検定と分散分析によって分析された。多読記録表および面接から得られた読解方略が分類された。

4 結果と考察

テキスト上の事実を問う問題を中心とした多肢選択式の読解テストにおいて、実験群1と統制群の参加者との間に読解力の有意な差は生じなかった。しかし、ある程度の量を読破した参加者は事後テストで伸びた。また、多読が伸ばした力が、採用された多肢選択式の問題で測りきれなかった可能性が残った。読解方略の認識に関するアンケートにおいて、トップ・ダウン方略の認識をやや高めた。面接および多読記録表の質的データにおいて、実験群の参加者は感想を述べたり、推測したり、疑問点を述べたりするなどテキストと相互作用する方略を多用することが明らかとなった。結果的に、立ち止まり、戻り読みをするので、読解速度が遅くなることがわかった。

読解テストと読解方略の認識に関するアンケートにおいて、実験群1と実験群2の参加者との間に読解力に関する統計的に有意な差は生じなかった。実験群2の参加者は多少のメタ認知的知識を身につけたが、読解テストの成績や認識を左右するほどではなかったと解釈できる。あるいは、チェックリストによる読解方略の自己評価だけではメタ認知的指導は不十分だったのかもしれない。面接および多読記録表の質的データにおいて、実験群2の参加者の方が多読に適した方略をより多く使い、読解の監視をより適切に行ったことが明らかとなった。

実験群の参加者は、事後評価アンケートにおいて、長い文章を読むことに不安がなくなり、文章を読むことが好きになったと情意面の変容に関して否定しなかった。未知語は読解困難の一番の原因であったが、方略を使えるようになったことには肯定的だった。読みの自由度が上がれば上がるほど、動機づけを維持することが重要になると推測される。

実験群の参加者は、題材内容中心に選択し、検定教科書の題材を決してつまらないとは思わなかった。自己選択であったことが難易度や興味に影響を与えたと考えられる。また、読後のタスクの種類によって速度を重視するか、読みの深さを重視するかなど多読を性格づけることが示唆される。

5 教育的示唆

多読は英語での読みを母語による読みに近づけるために有効な手段である。また、教材の自己選択は、熟達度や背景的知識、興味・関心の個人差に対処する。感想や批評を求めるタスクは、読みをやや主観的にさせる傾向があるが、初級の読み手でもトップ・ダウンの方略を活用させ、批評読みをさせる足がかりとなる。学習目的に適したテキストの選択とともに、学習目的に適したタスクの選択が推奨される。

読解方略指導は、読解の知識と経験を提供する方法である。自律した学習者あるいは自立した読み手の育成を目指すとするれば、方略指導は目的に応じて方略を活用できる読み手の育成に有用である。週3時間の必修教科としての通常の英語科授業のみならず、選択授業においても読解方略指導が有効活用できる可能性がある。

6 今後の課題

多読自体に多くの変数が存在するので、条件を変えたさまざまな追実験が必要である。とりわけ、多読指導だけを受ける群、読解方略指導だけを受ける群、多読と読解方略指導の両方を受ける群を比較する必要がある。その際に、読解力の測定方法や実際に使用した方略のデータを得るための方法を改善する必要がある。さらに、英語の読解力以外の要因（例えば、日本語での読書経験、そこで身につけた認知・メタ認知読解方略）を考慮することが課題である。

指導 平野 絹枝